

☆スポーツ振興大賞		
作品名	九州オルレ (の取り組み)	
応募者	一般社団法人九州観光推進機構 (福岡市中央区)	
<p>作品の概要</p> <p>「九州はひとつ」の理念のもとに、九州観光推進機構は官民協力で2005年4月に設置され、国内主要都市圏やアジア圏欧州圏からの誘客に取り組んでいる。九州への外国人入国者数は、2014年160万人を超える勢いで増加傾向にある。そのうち韓国からの入国者数は、約60%を占め、九州にとって韓国は最も重要な市場。需要喚起策として当時韓国国内でブームとなっていた「済州オルレ」に着目し、九州各地の自然豊かで魅力的なトレッキングコースを「九州オルレ」として韓国市場にアピールすることとした。</p> <p>「オルレ」とは済州島の方言で「家に帰る細い道」という意味であり、道が主役である、物語がある、アスファルトを避けるなどのコンセプトのもとにコースが設定されている。2011年8月に「(社) 済州オルレ」と業務提携を締結し、2012年2月4コース(武雄、天草・維和島、奥豊後、指宿・開聞コース)を「九州オルレ」第一次認定コースとしてスタートし、2015年2月時点で九州各県に15コース(平戸、天草・松島、高千穂、霧島・妙見コース他)を認定。参加人数は約73,700人(内、韓国人約50,000人)。コースオープン後、それぞれの地域において、韓国人訪問者と地元住民等との様々な交流も行われている。</p>		
☆スポーツツーリズム賞		
国土交通省観光庁 長官賞	作品名	若狭路スポーツトリップ
	応募者	一般社団法人若狭路活性化研究所 (福井県三方上中郡若狭町)
<p>作品の概要</p> <p>日本海に面した若狭地域は、多くの海水浴客が訪れたことから、50年ほど前から民宿経営を中心とした観光業で発展してきた。また、原子力発電所が建ち並び、地元住民の雇用の場として大きな意味を成していた。リーマンショック以降の景気低迷と東日本大震災による風評被害で、観光客は激減、雇用喪失と、苦しい状態であった。</p> <p>この状況を打開するため、「持続可能な発展のための活動」「魅力ある若狭地域作り」を目的として「スポーツイベントの開催」に一企業として取組んだ。行政に頼った運営では、資金力が無くなった時、開催が不可能になる。また6つの市町村からなる地域の壁を乗り越えるため、「企業の主催で開催する」ことに拘った。</p> <p>2012年に「若狭路センチュリーライド2012」を初開催。その後、オープンウォータースイミングやトレイルランなど競技数を増やし、3年目の今年は3つのイベントで全国から合計2,000名の方々が参加。地元スタッフも述べ300人以上が協力し、この地域にとって大きな財産となった。</p>		
日本スポーツツーリズム推進機構 会長賞	作品名	留学生スキーインストラクター『おもてなしスノーレンジャー』育成プロジェクト
	応募者	留学生スキーインストラクター『おもてなしスノーレンジャー』育成プロジェクトチーム (北海道札幌市中央区)
<p>作品の概要</p> <p>北海道への2013年の外国人来道者数は101万4700人。国・地域別では台湾、韓国、中国、香港、タイの順で、アジア圏からの来訪者が外国人全体の約9割を占める。また、北海道には世界各国から約2,700名の留学生が来ている。北海道のスノーリゾートには、世界中からパウダースノーを求めて多くのスキーヤーが訪れているが、外国人スキー客に対応出来るスキーインストラクターが不足している。中でも中国語や韓国語が出来るスキーインストラクターが全くいない。</p> <p>この問題を解決するために、北海道に来ている留学生に着目し、留学生にスキーの楽しさを広め、「SAH認定スキー指導員」の資格を取得させ、外国人観光客の受入れ体制の充実と海外からのスキー観光需要の喚起とスキー場などの地域経済の活性化に寄与することを目的として北海道スキー連盟、大学、企業など産官学の連携による留学生スキーインストラクターの育成プロジェクトを立ち上げた。同プロジェクトは2013年度には18名の受講者があり、SAJバッチテスト2級に11名が合格、認定指導員にも6名が合格する事が出来た。現在29名の留学生等がチャレンジしている。中国語・韓国語等の対応ができ、母国に情報を発信できるスキーインストラクターの人材育成が重要な課題である。</p>		

☆スポーツとまちづくり賞		
経済産業省 商務情報政策局長賞	作品名 応募者	国際スポーツ雪かき選手権 一般社団法人日本スポーツ雪かき連盟（北海道小樽市）
	<p>作品の概要</p> <p>国際スポーツ雪かき選手権は、「雪かき競技」「雪だるま競技」「ボランティア雪かき」の3競技で構成され、雪で遊びたい人々を過疎と高齢化により除雪が困難になりつつある地域の「雪かきの担い手」とすることで、社会課題解決と観光振興を同時に実現。</p> <p>2014年1月、「第1回国際スポーツ雪かき選手権 in 小樽」を初開催。新たな冬のアクティビティとして定着させられると判断し、海外からも参加を募った。結果、外国人8、道外2、市外3、市内6の19チーム76人が参加。競技終了後は小樽の地ビールと海鮮鍋の懇親会を開催し友好を深めた。</p> <p>大会の様子を収録し、上海、シンガポール、台湾に配信。番組内で次回2015年大会を告知し、JTBが運営するJAPANiCANでチケットを販売するなどインバウンド誘致のルートを確立させた。</p> <p>今後は、雪かき競技の全国統一団体として、予選会方式の大会に成長させることでスポーツツーリズムの発展に寄与し、2026年札幌冬季オリンピックのエキシビションに採用されるよう努力していく。</p>	
日本商工会議所 奨励賞	作品名 応募者	湯のまち飯坂・茂庭っ湖マラソン大会 (スポーツツーリズムを主体とした飯坂温泉活性化プロジェクト) 飯坂マラソン実行委員会（福島県福島市飯坂町）
	<p>作品の概要</p> <p>飯坂を活性化したいという人たちが作成した手作りの大会である。紅葉とダム湖のコントラストが最高で、温泉があり、混雑等のストレスがない小規模で贅沢な大会。自然環境が豊かで、果物、野菜、お米、素朴で温かい住民がおり、高齢者にも人気がある。2007年11月に発足し、2011年震災年（第5回）でも1066名（県外536名）参加。直近の第7回では1262名（県外850名）参加。</p> <p>活動の経緯は、福島市にある飯坂温泉は松尾芭蕉の時代から名湯と知られ、戦前、戦後ともに福島市の経済の中心として活躍してきたが、東北新幹線の開通後関東からの日帰りが可能となったことなどから観光客の衰退がはじまった（ピーク1973年1,778千人/2010年811千人）。また、飯坂町茂庭エリアは福島市の水源等を目的にダムを1985年に着工、地域が湖面となる住民は移動を余儀なくされた。さらに少子高齢化の影響で2013年人口536名、60歳以上が253名うち70歳以上が157名と日本を代表する超超高齢化エリア。茂庭をスポーツのテーマパークとして開発していくことが住民の生きがいにつながり、飯坂温泉の奥座敷茂庭が活性化することが温泉の活性化につながると確信し、より贅沢な大会を目指し活動している。</p>	

☆特別賞		
スポーツ健康産業団体連合会 会長賞	作品名 応募者	「スポーツ鬼ごっこ」と「伝承鬼ごっこ」による産業・地域活性化への貢献 ～日本文化「鬼ごっこ」がスポーツに！人と地域のつながりづくり～ 一般社団法人鬼ごっこ協会（東京都世田谷区）
	<p>作品の概要</p> <p>2010年6月の設立以降、新スポーツ「スポーツ鬼ごっこ」の普及を中心に活動。全国8ヶ所の地域支部に、指導員・審判員ライセンス取得者が743名在籍。全国43都道府県、220市町村で普及活動を行い、活動開始4年半で愛好者は18万人を超えた。今年の全国大会には、60チーム（700名）が参加、観覧者を含む2,000名が来場した。</p> <p>また、新事例として、JTB コーポレートセールスと共同で「鬼ごっこを活用した職場旅行プログラム」を開発。閉鎖された夕張市のテーマパークを貸し切りにし、渋谷区のIT企業社員300名で「スポーツ鬼ごっこ」を実施。日頃運動の機会の少ないIT企業社員の健康改善、社内コミュニケーションの活性化はもとより、財政破綻をした夕張市での、地元ホテルへの送客や名産品の販売など、地域振興も兼ねた企画とした。</p> <p>今後は、様々なステークホルダーとの連携を更に強化し、日本発信の国際的スポーツとして普及を広げ、2016年には初の国際大会を開催、2020年東京五輪の公開競技化を目指す。</p>	